

BeNews

2010 SPRING

別府大学通信 NO.100

特集 「別府大学60周年」に向けて

シンポジウム「別府大学の新たな旅立ち」	2
パネルディスカッション「これからの大学像」	6
OBが語る「あの日 この日」	8
大学だより	10
短大だより	11
学園だより	12
研究室探訪	14
国際交流	15
進路情報センターレポート	17
石垣祭	18
秋桜祭	18
サークル紹介	19
学園アラカルト	20
後輩へ残す言葉	22
著書紹介	23



「falling behind」 大田黒翔代

シンポジウム「別府大学の新たな旅立ち」

別府大学は今年、創立60周年を迎える。グローバル化・多様性が叫ばれる中、学生にはどのような資質が求められるのか。また大学は学生に対してどのような教育を施せばいいのか。1月15日、別府大学の「新たな旅立ち」をテーマにシンポジウムが開かれ、西村明大学長、友永植文学部長、森口充暲食物栄養科学部長、佐藤哲哉国際経営学部長がパネリストとして参加した。司会は段上達雄教授。

基調報告：グローバル化と大学

別府大学長 西村 明

(要旨)

大学における今日的な意味での専門性の学習と人間性の陶冶ということの重要性について話してきたのですが、現代のグローバルな社会では多様性が広がり、その変化が早く、先が見えlessnessし、不安定で、複雑で、何を学んでよいのか分かりません。大学をただ出ただけでは、それらに十分対応できそうもありません。そこで大学は何を教え、学生は何を学べばよいのかを検討しなければなりません。大学は確かに専門分野の知識と技能を教えなければなりません、現代社会の変化と多様性に対応する細々とした特殊な専門性を教えることはできません。それゆえ、自分の学習した専門性を超える能力、基礎的な専門性と同時に多様で・特殊な専門性に対応できる能力、つまり創造性・ユニークさを展開できる能力を教えることが大学の使命ではないかと思います。大学では、一般的な専門性を教えるだけではなく、その専門性をさらにどのように超えていくかという能力を育成しなければなりません。なぜならば、学生が卒業した時には習った専門知識はすでに陳腐化しているかもし



れません。とはいえ、逆に学生には、多くのチャンスが広がっています。自分が目を見開き、世界をよく見れば、習った専門性を活用できる世界は多様であり、絶えず変化し広がっているのです。学生諸君はまず自信を持ち、自分で考えて、自分でそれを掴み取ってほしいのです。先生は掴み取る方法を教えますが、掴み取ってくれません。自ら大学での学習を踏まえて掴み取っていかねばなりません。大学院に行くことによって特殊な高度な専門性を身に付けることもできますが、学部では自分が習った専門性をさらにどのように超えていくかということを学んでいただきたいのです。それには、豊かな人間性が不可欠です。グローバルな世界で友情を形成していけるような人間になってほしいと思います。国際的な友情は自らの豊かな人間性や深い知識なしには成立しません。日本で通用しても、世界では通用しないことが沢山あります。国際的な結びつきは単に言語ではなく、その人のもつ豊かな心、世界を見渡す深い見識なしには長続きはしません。素晴らしい友だちを求めるためには、自分が素晴らしい人にならなければなりません。以上のように世界の変化と多様性に対応できるような専門知識を教え、他のひとをひきつけるような人間性を育てるところに今日の大学の使命があると思います。現代社会の複雑さ・多様性と変化の速さに一人では対応することはできません。その意味でも、友情、思いやりは専門家間の信頼できる協力関係を築く重要な要となっています。いま、私たちは、力を合わせて、他の人の知恵を借りなければ何もできません。個人プレーの限界性というのが明確になっています。以上のようなことが、先に述べました「横並びの社会からの創造的自立」と「多様性・変化の中に自らの発見」ということに繋がるのではないかと思います。

文学部60年の伝統と新たな船出

文学部長 友永 植



(要旨)

文学部長の友永でございます。今回のテーマにある「旅立ち」についてですが、旅立つためには、自分たちはどこから旅立つのかということをしかり見据えておくことが大切です。そのような意味合いにおいて、文学部の創立以来の60年間を振り返りながら、現在私たちが立っている出発点を確認してみたいと思います。

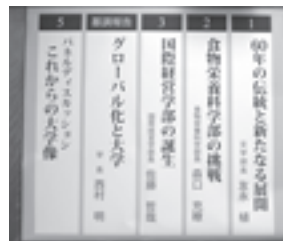
別府大学は1950年に「別府女子大学」として誕生し、同時に文学部も産声を上げました。1950年というと、1951年がサンフランシスコ講和条約の締結ですから、日本がまだ独立を回復していない時に生まれたわけです。この時点で大学すなわち文学部は、国文科と英文科の2学科しかありませんでした。そして、1954年に「別府大学」と改称し、男女共学になりました。その後、1963年に史学科、1973年に美学美術史学科、1997年に文化財学科が開設され、2000年に一番新しい学科として人間関係学科が開設されたわけです。

別府女子大学が開設された当初の卒業生は、国文学専攻2名、英文学専攻3名の合計5名だったといえます。定員もおそらくは20名程度ではなかったかと思います。また別府大学と改称し男女共学になった年の入学生は、国文学科が12名、英文学科が8名の合計20名だったといえます。本当に小さな小さな大学で、先生1人が学生2、3人を指導するといった状況で始まったわけです。その後、少しずつ学科が増えていきましたけれども、少人数の学生に対して教員がしっかり指導するというその伝統は、現在までずっと受け継がれています。創立期に比べます

と、学生の数をはるかに増えました。定員で申しますと、6学科体制における各学科定員の合計は510名でした。定員を上回る学生がいましたので、およそ1学年600人程度、大学全体で2400人程度の学生がいたわけです。1954年に入学生が20名だったということからすれば、本当に隔世の感があります。

この60年の間、文学部はこの6学科の下で、人間性の陶冶を教育の本質に据えながら、また時代のニーズを汲み取り、教育を展開してきました。一方、別府大学を取り巻く社会環境も大きく変化しました。戦後、日本は敗戦国として孤立した状態にありましたが、その後、経済発展を遂げる中で世界と緊密に結びつき、一方、情報化の展開の中で日本国内も緊密なネットワークで結ばれるようになりました。今日の私たちは、日本全国をそして国際社会を視野に入れてものを考え行動しなければならなくなりました。

このような新たな時代に対応するため、今年度、本学は大きな改革に踏み出しました。「新たな船出」です。グローバル化、ボーダレス化の進む21世紀社会において、さまざまな分野の学問や技術を身に付け、現実社会に対応し活躍できる人材を育成すべく、今年度、国際経営学部・国際経営学科を開設するとともに、文学部の改組を行いました。文学部の改組では、従来の国文学科・英文学科・芸術文化学科を「国際言語・文化学科」に、史学科・文化財学科を「史学・文化財学科」に統合しました。従来の各学科はそのままコースに再編し、その基本的教育内容はコースの中に温存しました。そして、旧学科のコース化によってそれぞれの垣根が低くなりましたので、複数のコースにわたって勉強できるようになりました。これを「副コース制」と呼んでいます。従来の6学科の基礎学問を土台に、更に豊かな学識と技術を身につけてもらうことによって、学生諸君の社会における可能性を今まで以上に広げようという趣旨です。このような教育の枠組みを作って皆さん方に将来の夢を託したいというふうに考えております。



食物栄養科学部の挑戦

食物栄養科学部長 森口 充暲



(要旨)

私どもの学部では、食を通して21世紀の健康的な社会の構築に貢献できる有為な人材、すなわち「食と健康のスペシャリスト」を食物栄養学科と発酵食品学科の2学科で養成したいと考えています。

食物栄養学科の学生は管理栄養士や栄養教諭をめざしています。管理栄養士は、個人の生活習慣の特徴を把握し、病気の予防のための栄養管理、疾病者に対する栄養指導、給食施設における栄養管理、衛生管理、給食経営のできる高度な食と栄養の専門家です。また、栄養教諭は、子どもたちに「食育」を通して食に関する指導を行い、子どもたちが健やかな身体を保ち、さらには将来の病気を予防できるように手助けをします。管理栄養士や栄養教諭は、直接「ひと」に食や栄養についてのサポートを行うことで人々の健康を守る仕事ですので、「こころ」を理解する豊かな人間性を備えた人材を養成したいと考えています。

微生物の存在を知らない太古の昔から、人類は経験的に微生物の作用を利用しながら醤油、味噌、お酒、納豆、ヨーグルトなどの発酵食品を作ってきました。発酵食品という立場から教育する学科は全国的にも極めて珍しい。「醸造発酵技術者への道」と題してお話をさせていただきます。醸造発酵技術は数千年の歴史を持つ発酵食品の製造に使われてきましたが、最近では調味料、医薬品や化学

品の原料、ビタミン・サプリメントやバイオエタノールなどの、将来はプラスチック、石油、水素ガスなどの生産に利用されるでしょう。発酵食品学科の教育の特色ですが、大分県は非常に、全国でも有数の醸造発酵産業の盛んな所ですので、教材は非常に豊富にあります。講義で学んだ知識を深めるために、学生実験(必修、11科目)を通して基礎的なバイオ技術を取得、さらに企業との連携で実践型教育、すなわち3週間の臨地実習(企業実習、必修)で現場で必要とされる知識・技術・ものの考え方などを体験し、3年生の後期から1年半の充実した卒業論文研究を行います。醸造発酵、食品や環境産業では、バイオ技術の無限の可能性に注目していますので、発酵食品学科は、バイオテクノロジーの知識と技術を兼ね備えた醸造発酵、食品、環境のスペシャリストを育成をめざしています。

発酵食品学科が、食物栄養科学部に設置されたことはどのような意義があるのでしょうか。醸造発酵や食品などの学問分野は農学部農芸化学系で教育、研究が行われてきました。食物栄養科学部に設立されたことは、食物栄養教育研究分野との融合により新しい学問領域の発展と人材の育成が期待されます。

食物栄養科学部では、「ひと」と「もの」の両面から、食・栄養・健康・環境など、私たちの取り巻く世界をよりよいものにしていくことに貢献できる、人間性豊かな人材を養成していきたいと考えております。どうもありがとうございました。



国際経営学部誕生

国際経営学部長 佐藤 哲哉



(要旨)

昨年4月の国際経営学部の開設に当たり、西村学長が地元の経済界と教育界の期待を反映し地元貢献できる人材育成をするべく構想を作られました。外国語、情報通信技術、異文化理解など、本日のシンポジウムを貫くテーマであるグローバリゼー

ションに対応した構想であります。グローバリゼーションについて、T. フリードマンは2005年の著書「世界は平らだ The World is Flat」で、アメリカの企業からコールセンターの仕事を請け負うインドの企業について述べています。アメリカの消費者はインドに電話をしているとは全く気づかないのです。30万人ものインド人がこのようなコールセンターで働いています。それだけのアメリカの職業がコストの安いインドに移っていますが、見方によれば資源の最適利用なのです。フリードマンは「誰もが成功と利益を望むけれど、変革を望むものはいない。変革に抵抗するのではなく変革に乗る、変革を起こさなければならない」と言っています。変革は実は身近なところで毎日起きています。家電で世界をリードしてきたパナソニックは、大型投資により太陽電池と利用技術を開発して世界各地に出ていくという非連続の戦略を持っています。世界の自動車産業が生産と輸出の拠点をインドに作る計画を持っています。インドの人件費は中国の3分の2程度です。素早い強烈なチェ

ンジを起こしている企業が多くあるのです。チェンジのキーワードはアジアと環境技術だと言われます。一方、変革の時代の価値として伝統文化があります。ケン・オクヤマという工業デザインのブランドがあります。GMのスポーツ車とかフェラーリ、グッチなどを手掛け世界的に高く評価される奥山氏は地方の文化に根差したデザインがグローバルな価値を持つと言っています。福井のメガネなど伝統を生かしたデザインを発信しています。

教育の世界でもグローバリゼーションは進んでいます。世界貿易機構は教育サービスとしての高等教育の自由化を推進しています。EUではボローニアプロセスとかソクラテス計画など学生が各国を移動する制度があります。世界経済がフラットになると均質な資質が求められるという面があります。アジアの教育をみると、最大の留学生受け入れ国アメリカでは95万人のインド人、81万人の中国人、70万人の韓国人、34万人の日本人が留学をして、異文化を経験しながら学んでいます。日本の大学や資格も国際的な比較をされます。フリードマンはグローバリゼーションへの対応について、小さな組織が大きく行動する、あるいは大きな組織が細かい心遣いをするをあげています。小さな会社がインターネットでネットワークを作り巨大な輸送会社に負けない仕組みを作ったのが前者の例、スターバックスが顧客の希望を入れて何百種類もの飲み物の提供をするのが後者の例です。別府大学も組織として外部環境を見据えて、海外の教育機関や企業と提携する、日本人学生と留学生の視点を融合するなどの道があるのではないのでしょうか。



パネルディスカッション「これからの大学像」

西村学長、友永文学部長、森口食物栄養科学部長、佐藤国際経営学部長の報告の後、段上達雄教授をコーディネーターに「これからの大学像」についてパネルディスカッションを行った。



段上 これからディスカッションをしていきたいと思いますが、最初は友永先生から。少人数教育の徹底、副コース制、それから進路を見据えたキャリア教育、資格修得の重視という話が出てきましたが、特に文学部はこういう点に力を注いでいきたいというものがございましたらお話しいただきたいと思います。

友永 これからの文学部教育のあり方ということで、私が日頃思っていることを少しお話ししたいと思います。学長のお話、それから森口先生、佐藤先生のお話の中で、大学教育の中の非常に重要な核として、人間性の陶冶というものがあるのだというご指摘がありました。人としてのしっかりとした認識力を身につけることはあらゆる学問分野における基礎だと思います。文学部における教育・研究は、本来そのような人間性の陶冶を目指すものであり、その意味であらゆる学問分野の基礎をなすものと思っています。

しかし、この学問はあくまで個人の内面を陶冶することを第一義するものです。日本国内あるいは世界がネットワークで結ばれた現代社会において、私たちは私たちの外に広がる世界との繋がりを抜きにしては生きていくことはできません。つまり、これからの時代を生き抜こうとする者にとってコミュニケーション能力は不可欠の資質となります。その意味でこれからの文学部における教育・研究はこれまでの内向きを第一義とする方向から、そこで培われたものを如何に外の世界と結びつけていくか、個人が他者や社会にどのように関わっていくかを模索する方向に大きく舵を切らなければならない

と思っています。その様な基本的な考え方に立って、それを学部・学科の教育にどのように反映させていくのか、これから皆さんのご理解をいただきながら考えてみたいと思っています。

段上 引き続き森口先生にお尋ねしたいと思います。食物栄養科学部では「人間愛」というか、その辺りが出てくる部分というのが食の非常に大きな問題ということではないでしょうか。

森口 食の安全・安心に始まり、食育・食習慣と疾病、食の機能性など、一般の消費者の食への関心は高い。食物栄養学科では管理栄養士として、また発酵食品学科では食品産業の技術者として、“食の安全・安心”に貢献できる人材の教育をめざしています。例えば、管理栄養士は人が相手ですので、人への愛情や人のところを理解する豊かな人間性が求められています。教養科目や専門基礎科目（「生活環境論」、「家族心理学」や「社会福祉概論」）などの講義からいろいろなヒントを得ることができるでしょう。

発酵食品学科は加工食品メーカーなどが主な就職先になりますが、数年前、食品業界の産地偽装や消費期限切れなどの食品業界の不祥事が起こり消費者の加工食品離れが進み、かつて雪印食品が輸入牛肉を国産と偽るなどして解散に追い込まれました。教養科目や企業倫理、生命倫理などの倫理観を養う「生命倫理学」などを学ぶことにより、食品製造技術者として自信を持って、安全・安心でおいしい食品を消費者の皆さん提供できる人材を発酵食品学科では育成しています。

段上 続いて佐藤先生にお尋ねしたいと思います。変化がめまぐるしい時代において、新設されたばかりの国際経営学部ではどのようなことを目指しておられるか、お話しただけませんか。

佐藤 急速な変化が起きています。最近の経営者は10年単位ではなくて、1～2年でずいぶん仕事のやり方が変



わると言います。大学として、森羅万象の変化をすべて教育に反映させることは難しいが、社会の変化をわれわれ教員が把握して、しっかりと学生諸君に伝えていかななくてはなりません。独りよがりにならないように学部として、企業にアンケート調査をして、社会が必要とするのはどのような人材かご意見を伺っております。いろいろな視点から注文が来ています。そういう社会の関心を学生諸君に伝え、将来、社会で活躍できる学生を育成していくことが重要です。ある著名な経営学者が「大学は学生を社会に送り出す発射台にすぎない」と言っています。知識社会においてだれもが常に新しい変化に対応し学習を続けなくてはならない。大学は正しい方向へ向かって突き進むための基礎力、判断力を与えねばなりません。友永先生、森口先生のお話で、人間性、倫理感を重視した教育がありました。先ほどお話しした経営学者は「利益は企業にとって必要だが、人間にとっての酸素のように適正量以上あっても仕方ない」と言っています。パナソニックの創業者も「企業の目的は利益でなく、社会への貢献である」と言っています。経営の学習も社会の厚生最大の最大化が目的といえるでしょう。

段上 最後に西村学長にちょっとお尋ねしたいのですが。先ほど佐藤学部長の方から、現在の日本は知識社会であるということですね。それと先ほど学長がおっしゃられたように、大学がフラット化してきているのだと。そういう知識社会も、専門的な知識を社会に出てもどんどん学ばなければいけない時代になる中で、大学というのはどういう立場を取るべきなのでしょう。

西村 誤解のないように言っておきたいのですが、平均化した専門性を学ぶということは、意味のない基礎的なことを学ぶということを言っているではありません。学生諸君は、大学では、特殊化された専門を各々のコースで学んでおります。文学部に入って文学を学び、或いは絵を描いている。これは非常に専門的なことなのです。ところが、習ったことだけでは社会に出て通用しないということを認識してほしいのです。つまり社会はどんどん変わっており、学んだことがすべて通用するという時代ではなくなってきました。大学での学習の先には、急速に変化した専門分野が広がっていますから、習った専門性を超える応用能力を身に付けることが大切なこととなります。

習うこと、学ぶことは簡単です。しかし習ったことだ



けではなくて、習ったことをもうひとひねりして発展させていくということが重要なのです。おそらく皆さんが大学を出て就職をしても、大学で習いましたということだけではなくて、それをもうひとひねりして創造し・発展させていく力が大切であり、この力を大学の中で、できるだけ先生と一緒に頑張って勉強し、先生のことを学ぶことが皆さんの課題ではないでしょうか。それは単なる専門力だけではなくて、その先生の人格、その生き方を学ぶことなのです。もっとも反面教師もありますが、知識社会といっても、知識を応用する力が必要で、大学はそういうことの基礎を教えることができるだけで、今の社会のあらゆるところに対応できるような知識すべてを教えるわけにはいきません。応用できる基礎能力、分析能力を大学では教えていきます。学生諸君はぜひこのことを学び取っていただきたいのです。それは、ただ本を読むだけではなくて、先生と顔を合わせながら学んでいかねばなりません。今日の講演でも、先生方は何気なく話しておられますが、先生方は一生懸命勉強し、準備しておられます。このような折角の機会、しかも3時間も費やしたのですから、何かを持って帰ろうとする精神・気構えを大学で学び、身に付けたいと願っています。

段上 学生の皆さんのご意見を聴く時間がなくて申し訳ありませんでした。今日のシンポジウムにおきまして、別府大学の教育というのは何を目指しているのかということが、学生の皆さんも、今日来られている一般の方たちにもお分かりいただけたのではないかと思います。学生の皆さんには、大学教育を受ける中で自己開発を推し進めていっていただいて、総合的自立を目指していただきたいというふうに思っています。パネリストの先生方、ありがとうございました。

OBが語る「あの日 この日」

草創期の思い出

別府女子専門学校昭和24年卒 丸山 幸子

文学部誕生から60年、その記念すべき年に草創期の思い出を書かせて頂くことを光栄に存じます。

思えば、1946年5月15日、私は胸をはずませて別府女学院（別府大学の前身）の入学式（現トキハインダストリー鶴見店）に臨みました。学長（創始者佐藤義詮）をはじめ、居並ぶ教授陣のモダンな風格にショックを受けました。学長の式辞に「真理はわれらを自由にする＝VERITAS・LIBERAT」があり、再びショック。更に授業が始まるや否や、英語はもとより、独・仏・露・ラテン語等、今まで目にも耳にもしなかった外来語が黒板や教室の空気を染めていく状態は、正しくカルチャーショックでした。しかしパニック状態の頭を癒してくれたのは、この石垣の地（鶴見から移転）でした。松や樺、その他雑木や灌木が深い森を作り、時折、斜光が木漏れ日となって地面を覆い、小鳥が鳴き渡るような環境は優しく私たちを心ゆくまで癒してくれました。学長も大変この森を愛されて、同窓会誌に「ルボア＝森」の名を付けられました。スクールバスの車体の色がフランスの国旗に似て「赤・白・青」なのは自由・平等・博愛をモットーにされた学長の発想であります。

私たちのカルチャーショックは遂に文化祭（現石垣祭）を立ち上げ、公会堂（現中央公民館）で、生意気にもシェークスピア原作の英語劇や、ミュージカルまがいの「青い鳥」等を上演しました。



思い出は尽きぬ

別府大学短期大学部商科昭和31年卒（第1期） 村松 秀一

人生には縁がある。その縁があったて短大の第1期生となった。入学式が別府市公民館で行われたのはユニークであった。六勝園から石ころ道を歩いてやっと正門に着くと森の中道に入る。何故か気持ちが癒された。また玄関正面のソテツを見て頑張る勇気が沸いたのも不思議だ。



開設当初の事情で時間割に集中講義の科目が組まれていたのに驚いた。正直疲れて次の授業にも影響を及ぼしたが、当時の状況として已むを得なかった。昼休みは弁当持参で裏の原っぱに集まり、今日の授業や将来について議論を交わしたものだ。四季折々変化する景色を満喫出来る場所でもあり一息つくのに適していた。帰りは正門を出て下り左側にあった馴染みのおばさんの小店に立寄り、饅頭を頬張って仲間と駄弁るのが楽しみであった。

学園祭は校庭でキャンプファイヤを囲んで、歌に踊りに夜の更けるのも忘れて青春を謳歌した事を忘れない。卒業式も別府市公民館で厳粛に執り行われた。小さな大学だからこそ先生と学生の一体感があったと思う。今、大学も大きくなり、より一層の共生を願うものである。



女子大から共学に

国文学科昭和31年卒(第4期) 久重サヨ子(旧姓 松田)

「真理はわれらを自由にする」の建学の精神のもと文学部設立から60周年の節目とのこと。私は女子大に入学し、共学で卒業となった貴重な体験者として感慨一入である。

終戦の混乱から立ち直り学制改革で戸惑いながらも、みんな希望に燃えた時代だった。

大学は教授も学生も実にユニークで、学友の年齢差は大きかったが楽しく、お互いに刺激し合い、少数ながらスポーツ、演劇等々の九州の大学大会には積極的に参加していた。

国文科卒の私の特に印象深いのは、川島つゆ教授である。年中和服で教壇に立った端正なお姿は実に美しく眩しかった。良寛、一茶の講義に魅せられ、卒業の年に上京した私は早速、俳人山口青邸の門をたたいた。その後、教授から『日照雨(そばえ)する海へのみち曼珠沙華の道』の色紙を頂いたが、当時路面電車を六勝園で降り、女子大の森までは遠くに学生寮を望む畑中の道、秋は曼珠沙華があちこちに炎え立っていた。先生のこの俳句は、別府大学創設当時の環境の全てが詠みこまれ、味わい深い一句である。私はこの句を励みに今も俳句を続け、当時を懐かしんでいる。



若いエネルギーを爆発

史学科昭和45年卒(第4期) 西村 隆司

昭和45年に史学科を卒業して40年が経過した。当時は学生運動の全盛期で、別府大学でも例に違わず学生運動が展開されたが、相反する思想の応援団の勢力も強く、また学生の8割が女性と云う学生構成もあり、よその大学とは異なり表面的には応援団優勢の展開であった。

学生運動に携わった学生は真面目な人が多く、一方応援団に所属する学生は硬派を看板とし、時には羽目を外すこともあった。私は学生活動家にも応援団にも多くの友人がいて、時には板挟みになることもあった。

思想や主義・主張は異なっていたが、双方とも若いエネルギーを存分に爆発させ、情熱と行動によって悔いの無い青春を送ったのである。双方のリーダー格の多くが競争率10倍前後の難関を突破し、堅い職業の公務員となり、地方行政の中核で活躍し、定年を迎えている。

私も含め強烈な個性を持った学生が多く、世間に甘えながらも自己主張して存在感を示していた。このような学生時代であったから多くの先生方に迷惑を掛け、先生方もヒヤヒヤドキドキの時代であったろう。



大学だより

第5回アジア太平洋管理会計フォーラム記

別府大学長 西村 明



アジア太平洋管理会計学会(会長西村)は、10月31日から11月2日まで別府大学国際経営学部の支援を受けてメディア教育研究センターで国際フォーラムを開催した。日本、中国、台湾、マレーシア、アメリカ、スウェーデン、カナダなどから50名以上が参加し、「世界的な金融危機における経営と会計の諸問題」について熱心に議論した。10月31日午前中は日本管理会計学会九州部会が開催され、報告者3名が最新の管理会計諸問題について報告を行った。引き続き、国際学術フォーラムに入り、まず別府大学高木准教授を始め、中国、マレーシア、カナダ、スウェーデンからの研究者が報告した。基調報告では、名城大学河田教授がトヨタ生産システムを支援する財務KPIについて述べ、ダイハツ九州株式会社東迫会長は、地球環境・地域環境に対応している新工場の姿を明らかにした。また、2日にはその工場を見学した。

11月1日は、11のプレゼンテーションがあり、

参加者は最後まで熱心に各テーマについて討論を行った。最後に、基調報告として、ニュージーランドからのウイレット教授は、メインテーマを受けて、現在までの財務会計・管理会計が取扱ってきた基本的な課題を整理し、今日的な金融危機、更には将来を見据えて、総合的で、長期的な視点から「有効で、信頼に値する財務リスク測定」を確立する必要性を述べた。しかもその政府、企業、研究団体は、総合的な研究体制を組織し、財務リスク測定の改善に積極的に寄与すべきことを強調した。また、31日と1日の2日間ホテルで懇親会が行われた。

以上のように、まことに過密なスケジュールの3日間であったが、今日管理会計で問題となっているテーマが幅広く取り上げられ、さらに4つの基調報告では、日本の自動車産業の現状と方向が議論され、最終的に今後の管理会計研究のあり方が取り上げられ、今回のフォーラムは管理会計研究者にとって真に有意義な国際学会であった。



短大だより

「べっぷ香りハーブフェスタ」で料理教室を開催

べっぷ香りハーブフェスタでは、食物栄養科の学生が、「ハーブスイーツを作ろう」コーナーと「ハーブの説明展示と試飲・試食」コーナーを担当し、全国のハーブを愛好される方々を招いた。これに向けて、学生全員が、ハーブの特徴を学んで新しいハーブスイーツの開発に取り組んだ。フェスタでは、その全員のレシピを展示発表し、優秀作品スイーツの展示とその試食ができるようにした。また、ラベンダーケーキ、カモミールケーキ、ペッパーチョコケーキの3種の中から選んだケーキを学生と一緒に作るなど、楽しい時間を過ごした。来校した方々800名には、ローズヒップジャスミンクッキー、ローズマリーとクルミのクッキー、チョコミントクッキーの3種類のクッキーを学生が自分たちで作ってプレゼントしたが、こうした過程を通じて、学生にとってハーブは身近な物になり、またこれからの自信となった。

その他に田村隆講師による、和食にハーブを使った創作料理の調理実習（「癒しのヘルシー料理教室」日本料理にハーブの風を）も行われた。

（食物栄養科 立松 洋子）



進路決定に向けて

短期大学部地域総合科学科では、春休み期間中の2月から3月にかけて、1年生を対象にして、「進路支援のための春季集中講座」を行いました（全5日間）。

講座内容は、①専門のキャリアカウンセラーの先生と協力しながら、徹底的な個人面談を行い、進路について迷っている学生の相談に乗る、②接客業の講師の指導のもとで対人マナーについて練習する、③就職試験対策として知識・一般常識の学習を行うが、単純な講義形式はできるだけ避けて、自分で目標をたて、やったことの成果が自覚できるような授業形式を工夫する、の3つです。

学科では、2年間を通して面談、就職セミナー、知識対策学習などの進路支援のための授業を行っています。春休みはじっくりと腰を落ち着けて取り組むチャンスなので、学生はこの講座で将来へのイメージを確かめて、2年生が始まると同時に進路決定に向けて走り出すことになります。

春休み中の進路支援対策としては、この他にも、企業とのアポイントから受験まで実際に挑戦する短期集中の支援講座も設けており、とりわけ活動時期が早い企業への効果が期待されます。

（地域総合科学科 三浦 勝良）



学園だより

第18回全国ハーブサミット別府大会

第18回全国ハーブサミット別府大会が平成21年11月7日（土）から8日（日）まで「ONSENが育む『香り』と「癒し」」のテーマで、7日は別府大学でプレサミット会場として、約500名の参加者で盛大に開催された。

午前のシンポジウム・記念講演では主催者の浜田博別府市長の挨拶の後、文学部文化財学科学生による「観香マップ作成に關わって」研究発表があり、続いて「香り」と「癒し」シンポジウムでは、本学中山昭則教授がコーディネーターとなり、パネリストとして香りのデザイン研究所所長で別府大学客員教授の吉武利文氏、京都大学名誉教授由佐悠紀氏、ガーデンプランナーのジャルディニエ佳代子氏が、「香り」と「癒し」の専門分野について議論した。



引き続いて、午後は大会実行委員長の西村駿一学園長の挨拶があり、シンポジウムのパネリストも務めた吉武利文氏の記念講演『別府の香り遺産 石菖の香り』があり、石菖を「和風ハーブ」と位置付けて、現在利用されているのは別府温泉郷の鉄輪温泉が唯一で、『香りの遺産』としてこの伝統を守るべきであると結論づけた。

午後の別会場で、志野流香道松隠会理事の荻須昭大氏が、香道は我が国の独特



の芸術文化であり、香を嗅ぐことを香道では「聞く」といい、香木の種類やその身体に及ぶ効能について講演された。その後の聞香体験では、代表6名が、「三夕香」という香道の遊戯である「組香」を体験し、参加者全員がその聞きあてた一種類のお香を興味深く聞香する体験をした。

別会場の、『癒しのヘルシー料理教室』では、つきちの料理長の田村隆氏の指導で、和食にハーブを使った創作料理に参加者40名が挑戦した。また、『ハーブスイーツを作ろう』では、本学短大立松洋子教授の指導で、ラベンダー・カモミール・ペッパーチョコの三種類の中から選んでケーキを短大食物栄養科の学生と参加者が一緒に作り大賑わいだった。



大分香りの博物館では、別府大学短期大学部食物栄養科で製作した「手作りクッキー」と「ハーブティー」をサミット参加者や観光客に無料配布し、好評を得た。



また、市民交響乐团によるコンサートが香りの博物館カフェであり、同3階では、本学茶道部による、「癒しのお茶会」が開催され、大会参加者や一般観光客が大いに楽しんだ。

（第18回全国ハーブサミット実行委員 小松伸二郎）

看護観発表に参加して



平成22年1月8日、別府大学附属看護専門学校での学習の集大成として2年生の看護観発表と大分大学医学部の引地孝俊准教授の講演が行われました。先輩方は6カ月間の臨地実習を終え、実習での体験や学びを通して自分の看護観を発表しました。先輩の一人は、「人間の価値観と同じように看護観も成長や体験の中で変化していくもの」と述べていました。私自身「看護とは、知識・技術を兼ね備え、対象者に勇気と希望を与える、その人らしい生活を支えること」と考えています。しかし、先輩の発表を聞いて、固有の価値観に捉われず、その時々で柔軟に変化し改めていく必要性を知りました。

講演は「緩和ケアで看護師に求められるもの」をテーマに行われ、心と身体の相互関係を話されました。心と身体は一体で両方を捉えることで、その人が見えてくることを学びました。

私たち1年生は、1月18日から基礎看護学実習が始まります。患者様一人一人に合った援助を提供できるように、取り組みたいと考えています。

(附属看護専門学校全日制 40回生 満江 春奈)

公開保育の機会に感謝して



九州保育研究会の第3回研究集会在本学で開催（平成21年11月）され、「公開保育」の機会を得ました。附属幼稚園としての公開保育は、4年ぶりのことです。

当日は、好天に恵まれ、3・4・5歳の全園児140名が、保育者や友達と「自分の思いを出す」「伝える」「共通の目当てに向かって考えを出し合う」などして、好きな遊具や自然豊かな園庭、トトロの森などで遊ぶ姿を多くの参観者に見ていただき、その後、メディアホールで「今日の保育のふりかえり」を行いました。「子ども達が生き生きとしていた」「細部にわたり環境が整えられていた」「先生達が子どもの姿や成長をしっかりとらえている」などの温かい言葉をいただきました。

環境を通して行うことを基本とする幼児教育です。日頃から大切にしている考えや実践を「保育案」にどう盛り込むか、環境をふさわしくどう整えるか、教員にとって日々の保育を深く考える機会となりました。大学の先生方には、大変お世話になりました。

保育者養成大学の附属幼稚園として、教育実習生の指導、大学の先生方や学生の教育・研究への協力、幼児教育の発信を行っていきたいと考えています。

(附属幼稚園 久保田貴子)

研究室探訪

討議デモクラシーの実践

篠藤明德研究室（人間関係学科）

私は、1981年から96年まで16年間ドイツで生活していましたが、その時の恩師、ペーターC・ディーネル教授（ヴァパタル大学）が考案した市民参加の手法・プラーヌンクスツェレが日本でも急速に注目されるようになりました。その背景には、個々人の意見を集計することで全体の利益を推測しようとする集計民主主義では、民主主義はもやは立ち行かない、という危機意識があります。“集計”ではなく“討議（熟議）”こそが民主主義のコアである、という「討議デモクラシー」の考えです。しかし、80年から盛んになったこの理論は、どのように実践すべきかが問われるようになり、上記のプラーヌンクスツェレに注目が集まっています。私は偶然、ディーネル教授に直接学び、日本人ただ一人の弟子であったため、現在、日本各地で先生の思想とその手法を説明しています。日本では、そのコンパクト・モデルが「市民討議会」の名で普及し、この3年間、60を超える自治体で実践されています。



幅広い経験で運動生理学

中山正剛研究室（初等教育科）

中山正剛（せいこう）先生は、今年度本学に来られた新人の先生である。運動生理学という若干取つきにくそうな専門ということで、興味津津、研究室を訪問させていた

だいた。バリバリの野球青年だった先生が、大学卒業を目前にして「大学の先生になりたい」と一



念発起して入った大学院研究室で、右も左もわからぬまま、恩師の先生に言われるままに福岡県の各地を回った。自治体などが行う高齢者や要介護者の健康支援事業の実態調査であり、現在まで続いている研究テーマである。とにかく、形式的になりがちなこうした支援事業だが、その効果は、数字に必ずしも表れるわけではない。お話をうかがう中で、中山先生はお年寄りの表情や雰囲気をつい読み取るか、また「幸せ」な状態というものが人それぞれであることを忘れずに支援にかかわるべきことを強調されたことが印象的である。

「教育」「研究」だけでなく、前職の専門学校では「営業」も経験されたそうで、幅広い経験を生かして別府大学で活躍していただきたいと感じた。

国際交流

(1) 学校法人別府大学と韓国大邱科学大学との間で「遠隔交流授業」を開始 短期大学部学長 田中 恒治

現代社会のグローバル化やIT化の進展に伴い、我国の高等教育の在り方が急速に変化しつつある。

いち早く遠隔教育に取り組んだアメリカ、イギリス、オーストラリア等の先進国では、新たな有識者の再教育・再訓練のためのマーケットを開拓し、教育サービスを輸出し始めている。

それに伴い、ユネスコとOECDは「国境を越えて提供される高等教育の質保証に関するガイドライン」を策定する等ITを活用した教育の保証についての議論も本格化しているのが現状である。

このように高等教育のグローバル化が進行する中にあって、世界的に教育機会の拡大にも貢献出来ると共に、留学や海外での分校設置という物理的な実態がある、いわゆる「越境する教育」を取り除くことも可能になり、さらには、教育効果を上げるとともに、授業の予習復習や、授業の理解度を把握すること等、こうした目的を遂行するのに便利なものである。

また、最近の教育の国際化には、留学生の確保のみならず、グローバルスタンダードにあわせて、いかなる言語で授業を提供するか、どのようなタイプの授業方法を取り入れていくか、或いは、自国の学生を海外で研修や留学体験をさせる機会をどのように提供するかが大切なこととなっている。

先にも述べたように、高等教育の国際化に関して、かつての動向と現在の動向の差異の一つとして挙げられるのは、現在では国境を越えて、大学同志が提携しあう大学が増加していることである。つまり、国境を越えての国際的な連携が活発化している点である。

本学園も、このような時流に遅れることのないよう、2008年の学園創立100周年の記念事業の一環として、

2006年「メディア教育・研究センター」の設立にあわせ、2009年10月13日姉妹校の韓国大邱科学大学との間に「通信メディアを活用した交流に関する覚書」を結び、メディアを活用しての遠隔授業、遠隔会議、発表会等を実施することにしたところである。

この計画に基づき、以来12月末まで9回の授業とその仕上げとして、スピーチコンテストも実施したところである。

授業内容は

(1) 大邱科学大学の学生に対して

- ・日本語の発声・発音の基本練習－母音・子音・清音・濁音
- ・日本語による人形劇

(2) 別府大学の学生に対しては

- ・韓国語による会話実践
- ・日本でのインターンシップの報告等

なお、10回目となる12月10日には、「将来の夢、遠隔授業に期待する」というテーマで、日本の学生は韓国語で、韓国の学生は日本語でスピーチコンテストを行った。

遠隔授業実施後、わずか2ヶ月余り、両国の学生達のすばらしく流暢な言葉遣いに深い感銘を覚えるとともに交流授業の意義を再認識させられた次第である。



(2) 別府大学短期大学部における国際交流の取り組み状況

短期大学部学長 田中 恒治

別府大学短期大学部は、日増しにグローバル化の進む現代社会の中で、本学部を世界に向けて開かれたものとし、教育と研究の国際化、学生の国際的視野の拡大等を推進し、これからの国際人としての素養を身につけることを目的に1988年以来、世界各国、特にアジア各国の大学を中心に学術交流協定を締結し、交流を積極的に行っています。

現在、本学部が交流を続けている国及び協定校の状況等は次のとおりです。又、メディアセンターの建設を機に、韓国大邱科学大学との間で「遠隔講義システム」を活用した交流授業を毎週行い、両校学生の相互

言語力の育成と日韓相互理解の促進や友好親善に寄与しているところです。

しかしながら、これまでの交流は学生が活動の中心であったが、今後は教員同志の交流がもう一つの柱としての役割を果たすべきであると思っています。

更に、本学で普通に行っている教育や研究活動等が協定校や相手国の参考になり、逆に、日本では見落されていることが海外では有効活用されている事例に触れることができるなど、予期せぬ収穫も考えられるため、協定校との交流が互恵的なものとなるよう心がけていきたいと思っています。

国	大学名	内 容 交 流	
		本学部から海外協定校へ	海外協定校から本学部へ
韓国	釜山経商大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	言語、風俗、文化、習慣等の修得のため短期、長期留学生として
韓国	大邱科学大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施
韓国	漢陽女子大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施
韓国	安山工科大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施
韓国	東元大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施
韓国	永進専門大学	言語、風俗、文化等の修得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施
台湾	景文科技大学	台湾料理講習や言語、風俗、文化などの習得のための学生派遣	職業観・勤労観の育成や専門教育の日本での実地学習のためのインターンシップの実施 日本料理講習
フランス	国立教員養成大学(IUFM)	言語、幼・小・保育所の視察、学生交流	言語、日本文化の修得、幼・小・保育所観察

メディアセンター舞台に交流

学校法人別府大学のインターンシップ受け入れはメディア教育・研究センターが舞台。韓国政府の支援で派遣された学生は、別府大学と韓国の各大学との「遠隔授業」でセンター・スタッフとともに機材操作などに従事する。学生は情報通信技術を学ぶだけでなく、日本人学生らとの親交も深め16週間の研修を終える。
(メディア教育・研究センター)

進路情報センターレポート

3年次生の就職活動が始まる!!

「学内合同企業等説明会」

2月4日、別府大学就職委員会の主催で「学内合同企業等説明会」を開催しました。学生は実施要領の説明を受けた後、会場の体育館へ移動し各企業、団体毎のブースを訪問しました。

今年の「学内合同企業等説明会」は、アステム、セコム、東京海上日動火災保険など新規参加企業が増加し、昨年より24社多い64社となりました。今回は、体育館のフロア全体に各企業のブースを設置し、3年次生の240名が参加して実施しました。昨年度と違って分散していた会場が一カ所になったのに加え、参加企業の増加もあり、学生は効率よく自分の興味、関心のある企業を訪問し、今後の就職活動の弾みになったとの声が多く聞かれました。厳しい就職状況を反映して各ブースは盛況で、学生には就職状況の厳しさと早い就職活動の必要性を実感したと思います。



「公務員試験合格者体験報告会」

また当日は、平成21年度の公務員試験に合格した4年次生から、現在受験準備に取り組んでいる3年次生へ貴重な「公務員合格者体験報告会」も開催されました。報告者は、佐賀市役所に合格した木下松美さん、東京警視庁に合格した豊福倫教君、刑務官に合格した西村一志君の3名(いずれも史学科)でした。

合格した4年次生3名からは、自分の学習方法や受験スケジュールなどの具体的な受験対策についての説明があり、3年次生の公務員希望者へのこれからの就職活動についての指針となりました。なお、3年次生の参加者は38名で、全体説明の後に、個別面談の時間もあり、大変有意義だったとの声も聞かれました。

福岡で「合同企業説明会」

平成21年12月1日に75名(バス2台)、2日に36名(バス1台)でマイナビ主催の福岡ヤフードームに参加。その後の第2回目として計画していた12月19、20日は雪で参加を中止しました。

また2月9日には、福岡マリンメッセで開催のリクルート主催の「合同企業説明会」へ無料バス5台を運行しました。今年の就職戦線は、大手企業を中心に例年になく動きが早く、エントリーシートの提出や企業説明会に参加を義務づけるといった企業が増加しています。今年度卒業の4年次生の就職状況が非常に厳しいものがありましたが、平成22年度は一層大変になることも予想されています。

また地場企業には、従来なら応募に来なかった大学からも殺到しているとの情報もあり、内々定を得るのに早い情報の収集と自ら就職活動をすることが求められています。

石垣祭

「一喜一優」

今年度の別府大学石垣祭は64回目を迎え、11月21日、22日の2日間にわたり開催されました。今回の石垣祭は「一喜一優」というテーマを掲げました。このテーマには、ひとつひとつに喜びを一人ひとりに優しさをとという意味で、本学の学生、地域の方々、教職員の方々に様々な企画を通して楽しんでもらいたい、またこの石垣祭で多くの方と交流を深めてもらいたいといった思いが込められています。

ステージでは各サークルや研究室によるパフォーマンス、別府大学一の歌声を発掘するといったカラオケ大会やミス別府大学コンテスト、さらには様々なゲストライブが行われました。またステージ企画だけではなく、教室を使用しての展示や企画、各サークルや外部からの模擬店の出店もあり御来場の方々が楽しんでいる姿も印象的でした。

そして、石垣祭の締めめの恒例となった沖縄県人会の「エイサー」が行われ、学生、地域の方々も一緒に踊っている姿を目にし、石垣祭に参加して下さった皆さんに、今回のテーマであった「一喜一優」の思いを贈ることができたのではないかと思います。

(石垣祭実行委員 大石 和明)



コスモス 秋桜祭

かなで「奏」をテーマに想いはひとつ

今年の秋桜祭は11月14日(土)に開催されました。テーマは「奏(かなで)」でした。

「奏」という一字には、ひとつのハーモニーを奏でるかのように、みんなの想いをひとつにし、秋桜祭を作り上げよう、という想いを込めました。この一字にふさわしく、私たち秋桜祭実行委員会は一致団結し、今までにないような、素晴らしい秋桜祭を作り上げることができたと思います。

特に力を入れたイベントとして、エンディングにお笑い芸人の芋洗坂係長さんが、秋桜祭だけに宛てたビデオレターをサプライズで流させていただきます。芋洗坂係長さんの声にみんなで応えるなど、会場全体がひとつになりました。

2009年度の秋桜祭はみなさんのおかげで大成功のうちに終えることができました。秋桜祭を作り上げる為に協賛金を寄付して下さった企業のみなさま、アイディアを出していただいたり、作業を手伝って下さった先生方、大分キャンパスの全学生のみなさん、そしてなにより頼りない実行委員長を支えてくれた実行委員のみなさん、本当にありがとうございました！

2010年度の秋桜祭の成功を祈っています。

(秋桜祭実行委員長 小柳 朋子)



サークル紹介

スポーツ振興会

スポーツ振興会(学生団体)は、31年の伝統を受け継ぎ、新たに32年目を迎えることができた。

別府大学の建学の精神である『真理はわれらを自由にする』のもと、スポーツ振興会は進化、発展を遂げている。本年度は全国ハープサミットへのボランティア参加、防犯パトロール隊に参加して、大学周辺の地域と連携を取りながら、地域社会に貢献している。スポーツ面以外のあらゆる面において、非常に高い信頼、評価を頂いている。もちろん、本来の活動に関しても、スポーツ振興会に所属している体育系26サークルが、自らのサークルの運営方法、練習メニューを考え、より高い目標に挑戦している。日々仲間と協力しながら練習に励み、他大学に負けない成果を残している。

31年という長い歴史の中で培われてきた伝統を受け継ぎ、本年度からまた新たなスポーツ振興会の歴史を創っていくと共に、所属している学生が、「スポ振に入ってよかった」と思える環境づくりをし、1人1人が有意義な学生生活を送れるよう、今後も第32代のモットーである、「やる気」と「笑顔」を大切に、日々精進していく所存である。(別府大学スポーツ振興会:体育系サークル26サークルをとりまとめた学生自治団体)

(スポーツ振興会 第32代会長 山鹿 晃平)



文化会

文化会とは27団体の文化系サークルの集まりである。それぞれ、サークルが文化的目標や目的を持ち、日々楽しく活動している。各サークルごとの活動の他に、文化会全体で取り組む活動もある。

例えば5月のさつき祭、11月の石垣祭(学園祭)、3月のリーダーシップトレーニング(研修旅行)等がある。さつき祭は各サークルが紹介CMを作成し上映したり、ステージで様々な企画が催されたり、展示を行う等、各サークルの活動がはっきりとわかる場所である。また、文化会は全体として積極的に別府市を中心としたボランティア活動に力を入れている。春に行われる別府市主催の温泉祭は、市民総参加による温泉に感謝するお祭りで、文化会は御神輿を担ぎ地域との交流を深め、構成員はとても良い社会勉強になる。また、別府大学は『別府市防犯パトロール隊』という団体に参加しており、文化会からも多くの有志がメンバーに登録し、別府市の安全のため活動している。

こういったサークル、ボランティア活動で学ぶ人間関係や様々な経験が社会人になった時に必ず自分の役に立つと信じている。これからもっと楽しく充実した活動を各サークルに期待したいと思う。

(文化会 第30代会長 植田 啓紀)



学園アラカルト

別府大学と明豊高校から選手がプロ野球・ドラフト指名

明豊高・今宮健太選手 ソフトバンクから1位指名!!

明豊高等学校野球部の内野手兼投手の今宮健太選手が、ドラフト会議2009にて、福岡ソフトバンクホークスから1位指名を受けました。

10月29日に東京で行われた会議では、各球団が1位指名から順に候補選手が挙げられ、今宮選手はホークスから単独で指名されました。

当日は各社の取材を受けた後は、満面の笑顔の中にも新たな挑戦と目標を抱いているように見えました。

その後は1月9日から新人合同自主トレに参加し、2月からの宮崎キャンプに備えていました。プロでの生活がスタートする今宮選手の今後が期待されます。

今宮健太選手からのメッセージ

14年間続けてきた野球にこれからも正々堂々と挑み、高いレベルで高い目標を持ち続けたいと思います。

また、後輩が甲子園をめざすことになりましたが、今後も応援をよろしくお願いします。

“正々堂々” 今宮 健太



別府大・岩尾利弘選手 西武から3位指名!!

岩尾利弘選手からのメッセージ

1年目から先発ローテーション争いに食い込むことが当面の目標です。テレビで見ただけだったプロの世界。大学入学後も特に目立った存在ではありませんでした。地道な投げ込み、走り込みを続けるとともに投球術を磨いたことで、2年時には全日本大学野球選手権出場に当たりチームに貢献できました。結果としてプロのスカウトの目に留まることができ、その後の練習に目標を持つことができました。

3位指名は本当に意外でした。今でも実感わかないし、自分でいいのかなと。ただ入団するのはあくまで通過点、10年以上先発としてローテーションピッチャーを努め貢献したいと思っています。

津久見市出身ですが、野球好きの人がたくさんいて、小さい頃から声をかけてもらっていました。そんな人たちが本当に喜んでくれているし、他にも自分の知らない所でいろんな人が応援してくれています。

別府大学出身としても初のプロ野球入団選手です。後輩たちも目標を持って続いてほしいと思います。

これから厳しい競争が待ち構えますが、しっかり足元をみつめ努力していきます。



留学生の地域体験授業

地域総合科学科の留学生は、今年度後期、例年にもまして多彩な日本文化交流事業に参加した。

学科の地域交流活動は、「観光野外実習」、「大分の文化と産業」、「地域参加実習」の3つの授業が柱となっている。観光野外実習では、豊後高田市の観光課に全面的に協力していただき、農業体験ツアー（ネギ、サツマイモ、レンコンの収穫体験）、日本文化体験ツアー（和太鼓、座禅）などを行った。地域参加実習では例年どおり由布市挾間町の「きちょくれ祭り」に参加、本部要員から駐車場整備まで一手に引き受けた。また、「大分の文化と産業」では、本学史学・文化財学科の飯沼教授の協力、ガイドのもと、2回にわたって研修ツアーを行った。1回目は「水をめぐる県南の旅」。白水の滝や焼酎のコマーシャルで有名な分水器などを見学した。2回目は、国東半島の豊後高田市田染庄の稲刈り収穫祭を中心とした企画である。収穫祭では留学生がかすりの着物を着て、稲刈りや脱穀に挑戦した。

今年協力していただいた豊後高田市は、留学生の反応を今後の企画に取り入れることになっており、地域連携における一層の展開が期待されている。

(地域総合科学科 梶原 博)



団体・個人で全国制覇—なぎなた部

本学なぎなた部は創設5年の若い部で、大学生3名、短期大学生3名計6名の精鋭で活動しています。練習は週6日放課後約3時間、大分西高校の体育館で行っています。高校の指導者から教えを頂き、高レベルの一般の先輩方や高校生と切磋琢磨しながら中身の濃い練習を重ねています。大学生だけでなく幅広い年齢の方々と練習することで、気がつくことも多く、技術面でも精神面でも非常に勉強になり、更に意識を高く持つことができ、日々成長しています。年々各種の大会で好成績を収め、国体選手を輩出し、県の有望強化指定競技にも指定されています。本年度は第48回全日本学生なぎなた選手権大会において、目標とした団体・個人両部門で優勝という輝かしい栄冠を勝ち得ることが出来ました。団体は昨年に続いての優勝で、個人では主将の板井選手が見事に頂点に立ちました。更に11月の第38回西日本学生なぎなた選手権大会でも団体・個人両部門とも優勝ができ、団体は3連覇を果たしました。実り多い、充実した年にする事ができました。これからも先生方を始め様々な面で支えて下さっている方々への感謝の気持ちを忘れることなく、我々部員一同は更なる目標に向かって一層の努力を決意しているところです。

(なぎなた部主将 板井奈津美)



後輩へ残す言葉



時間を大切に

大学生活の中で最も大切なことは「時間を大切にすること」だと思います。大学という場はそれまで自分がいた場所とは違い、自分にとって自由な時間

が増えてきます。その中で「自分の時間」を持つことが大学生活を充実したものにできるのではないのでしょうか。ただ、そういった時間を持つ上で、やるべきことはしっかりとやらなければ時間は無駄になってしまいます。

自分の時間を作れば、自分が本当にしたい事が見えてくるはずです。今後の人生において自分の糧となるものを、別府大学で見つけてほしいと思います。

(史学科 工藤 寛之)



周囲の助けに感謝

私は高校の時「スラムダンク」など日本の漫画が大好きになりました。日本を見たくなくて、温泉も好きだから、別府に来ました。知らない文化に対する不安、つらいことあった涙、心を温めた笑顔など、いろいろなできごと、いろいろな人の力があってこそ、今の自分があります。だから、友達にも、先生にも、同僚にも、みんなに感謝しております。人は一人で生きていけないから、感謝の気持ちを持って、お互いに支えあって、有意義な大学生活をおくっていきましょう。

(英文学科 曹磊)



何事も自分の姿勢

私は、保育科に入学してから、積極性を発揮することで学べる広がりがるのだということを実感しました。苦手だったピアノは日々の放課後練習に

励み、不安だった試験は一生懸命に勉強し、その努力は結果となって返ってきました。

何事に対しても、自分の取り組む姿勢次第だということだと思います。また、先生方は、とても信頼できる力強い味方です。就職や実習、その他日常のことなど何でも親身になって話を聞いてくださいます。このような先生方と大分キャンパスの豊かな自然は、自分の夢を輝かすことができる素晴らしい環境だと思います。後輩の皆さん、是非、保育科で頑張ってください。

(保育科 小手川奏恵)



同じ目標に向かって

2年間の学校生活で一番の思い出は、臨地実習です。実習では、朝6時出発、深夜、1時2時に就寝する日々でした。また、緊張の連続で身体的・精神的に本当に挫けそうな時もありました。しかし、患者様の笑顔や元気になっていく姿を見ると辛い事など忘れ、夢に向かって努力する事が出来ました。私は、患者様の立場に立ち、寄り添う事が出来る看護師になりたいと思っています。後輩の皆さんも、夢の実現の為に精一杯頑張ってください。

(附属看護専門学校全日制 河野 仁志)

著書紹介

「経筒が語る中世の世界」

小田富士雄、平尾 良光、飯沼 賢司共編（思文閣出版）

「キリシタン大名の考古学」

別府大学文化財研究所、九州考古学会、大分県考古学会編（思文閣出版）

両著書は別府大学文化財研究所が企画したシリーズ本の1冊目と2冊目である。

シリーズ第1冊目の「経筒が語る中世の世界」では経筒がどのような意図で製作され、埋納されたか。そして、実際の経筒の発掘状況とはどんな状態かに関してまとめられている。さらに出土状況から中世の人びとの考え方がどのように反映されているのか。また、経筒材料の自然科学的分析から、時代によって材料産地が異なることと、文献史料とでどのように整合するかに関して、幅広くまとめられている。

シリーズ第2冊目の「キリシタン大名の考古学」では最近の発掘で新たに発見された考古学的な事実から、キリシタン大名と呼ばれる大友氏、大村氏の成立過程の解明を試みている。そしてキリスト教がどんな形で受け入れられ、発展したかを最新の発掘による事実と文献から把握しようとしている。これに加えて、自然科学的な方法と文献学的方法とを融合させ、大航海時代の日本の経済的な基盤や、近代化にもたらした効果を明らかにしようとしている。

（これら2冊の本の一部が朝日新聞の文化欄（全国版）にそれぞれ、掲載された。）

（平尾 良光）



「アメリカ文学における階級－格差社会の本質を問う」

田中久男監修（英宝社）

本書は、18人のアメリカ文学研究者が、各々が専門的に取り扱ってきた作家を読解、分析したものですが、「階級」という共通の主題のもと各論が書かれています。ここで語られる階級は、経済格差に留まらず、人種、ジェンダー、セクシャリティー、芸術形態に至るまでの、広義のそれであり、文学作品の読解を通してアメリカ文化の一側面が切り出されています。別府大学からは三重野佳子と山野敬士が、それぞれB・マラマッド、T・ウィリアムズについて分析しています。

（山野 敬士、三重野佳子）



「ソーシャルワーク実践と支援科学

—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—

太田義弘編著（相川書房）

ソーシャルワークとは、人々の豊かな社会生活を実現するための支援活動つまり、社会福祉を実現するための専門的な実践活動の総称です。社会福祉の実践は、優しさや思いやりがあれば誰でも行えると誤解されることが少なくありません。しかし、社会福祉専門職の仕事は、科学的な知識と理論に裏付けされたものであるはずですが、本書は、入門書ではなく専門書として出版されたものですが、社会福祉士、介護福祉士など社会福祉専門職を目指す皆さんにチャレンジしていただきたい一冊です。

（伊藤佳代子）



2010年度 別府大学は創立60周年を迎えます

別府大学の60年

- 1908年 豊州女学校設立
- 1945年 別府女学院開設
- 1946年 別府女子専門学校認可
(国文科・英文科・経済科)
- 1950年 **別府女子大学設置認可**
(文学部国文科・英文科)
- 1954年 別府大学と改称（男女共学となる）
- 1963年 文学部に史学科設置
- 1973年 文学部に美学美術史学科設置
- 1989年 別科日本語課程設置
- 1997年 文学部に文化財学科設置
- 1998年 大学院文学研究科歴史学専攻設置
大学院文学研究科日本語・日本文学
専攻設置
- 1999年 大学院文学研究科文化財学専攻設置
- 2000年 文学部に人間関係学科設置
- 2002年 食物栄養学部一食物栄養学科設置
- 2004年 大学院文学研究科臨床心理学専攻修士
課程設置
- 2006年 大学院食物栄養科学研究科食物栄養学
専攻修士課程設置

- 2007年 食物栄養科学部にバイオ学科設置
- 2009年 国際経営学部国際経営学科設置
文学部を国際言語・文化学科、史学・
文化財学科、人間関係学科の3学科
に改組
食物バイオ学科を発酵食品学科に名
称変更

別府大学創立60周年事業（予定）

■大 学

「別府大学60年の歩みと今後の展望（仮題）」
(講演会とシンポジウム)

■文学部

「文学部60年の歩みと今後の展望（仮題）」
(講演会とシンポジウム)

●国際言語・文化学科

「時空を越えて香りで遊ぶ」(講演会)
「大分ユーモアまんが大賞」(公募制コンテスト)
「別府大学文学部創設60周年記念書道展」
(書道展と講演会)

●史学・文化財学科

「歴史教育の現状と課題」(日本西洋史学会60回大会)
「地域の歴史遺産と地域の活性化」
(講演会とシンポジウム)

●人間関係学科

「精神科地域包括医療を考える」(講演会と分科会)
「だれもが安心して暮らせるまちづくり」
(講演会とシンポジウム)